

# 紀伊半島秘湯巡り 2022



2022年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

旅行会社が募集した温泉巡りのパックツアーに妻と行ってきた。ツアーの正式名称は「個人では行きづらい本州最南端紀伊半島知られざる7つの秘湯巡り3日間」というもので、紀伊半島にも秘湯があるのかという好奇心から参加した。

## ■ 思わぬ再会

私と妻が参加した紀伊半島秘湯ツアーは東京から新大阪までは新幹線で行き、そこから大型バスで紀伊半島を巡るというもので、今私たちを乗せたバスは和歌山に向かっている。参加者は総勢22人、乗車定員の半分くらいなので全員がゆったりと座っている。このツアーは観光が全く無いのでバスガイドは乗車していないが、温泉好きの女性添乗員が案内してくれる。

私はバスの中から旅仲間たちにこれから紀伊半島の秘湯巡りをする旨をLINEで連絡すると、和歌山在住のヨコさんから反応があった。それは「何温泉に行くの?」というもので、私はこれから行く「花山温泉、黒潮温泉、龍神温泉、・・・」と連絡を入れると、彼から「花山温泉には何時頃に着くの?」という質問があり、私は「12時頃かな」と軽い気持ちで返信した。

バスは花山温泉に到着する。花山温泉は和歌山市内にあって、街はずれの山の麓で田舎とも都会ともどちらとも言い難い場所にある。それでも東京、大阪という都会の喧騒から離れて気分は上々、何とも清々しい。

そんな時にヨコさんから電話が入り、「あと15分で着くよ」と言っている。私は「えっえー」と驚きの声を発し、そして「まずは昼食を食べることになっているから、ロビーで待っていて」と言って電話を切る。そのことを妻に話すと、彼女は私以上に驚いている。

急いで昼食を食べて妻とロビーに行き、ヨコさんとの再会を果たす。彼は私たちが6年前に乗った地球一周の船旅で知り合ったので妻も良く知っている。ただ私とヨコさんとは先々月に北東北3県の旅を一緒に行ったが、妻にとっては久しぶりの再会になる。それにしてもパックツアーの行程の中で現地の友人と会うこともできるのだなと感心しつつ、スマートホンやSNSという道具は旅のスタイルをも変えてしまうことを実感する。

3人で再会を喜び、落ち着いてから花山温泉の話になる。ヨコさんは「この花山温泉のオーナーはボクの親戚だよ」と言っている。

廊下に飾ってある日本画を指差して「あれは親戚の〇〇さんが書いた」と言い、見ると立派な絵が飾ってある。そういえばヨコさんは地球一周の船旅でも水彩画を描いていたことを思いだした。やはり血筋なのか。



【再会した3人】

彼が次に指差したのは廊下の壁にある透明のパイプで、その中を勢いよくお湯が流れている。彼は「母屋の方に源泉があるので、そこで汲み上げた温泉をこのパイプの中を通して持っているよ」と教えてくれる。

いよいよ温泉に入っている。もちろんヨコさんも一緒だ。再会はロビーではなく、いきなり湯船だったらもっと劇的だったかもしれないなどと考えながら湯に浸かる。

花山温泉の湯はなかなか良い感じで、茶褐色の濁り湯で長野の白骨温泉のように温泉成分が固まって浴槽の縁に白くてやや茶褐色がかかった塊（かたまり）が出来ている。白骨温泉の湯は真っ白なので白い骨のようだから白骨になったが、ここ花山温泉の湯はやや茶色っぽい。ヨコさんは「この塊を定期的に削り落としているよ」と教えてくれる。

いろいろな浴槽があって温度によっていくつかに別れている。そうかと思うと茶褐色ではない単なる沸かし湯やサウナもある。源泉の湯と書かれた浴槽に入ると、ポコポコという音と共に源泉が出ている。先ほど廊下でヨコさんから教えてもらったパイプを通して供給されているらしい。



【花山温泉の湯船 宿の公式HPより】

露天風呂に浸かりながら2人の温泉サミットが開催される。この前行った東北旅行の話、今回の紀伊半島秘湯巡りの話、そして今度はどこへ行こうかと話は尽きない。

## ■龍神村の龍神温泉

花山温泉から海辺の近代的な紀州黒潮温泉に立ち寄り湯をした後、バスは内陸に向かい山奥の溪流沿いにある集落にやってくる。添乗員は「この地域が龍神村で、本日皆さんが泊まる龍神温泉があります」と言っている。

龍神とは、温泉名としてはインパクトがあつていいかも知れないが、村名としては何ともおどろおどろしい名前の村だろうと私が思っていると、それを察したかのように添乗員は「昔は龍神村という村が存在していましたが、2005年に田辺市と合併して龍神村は廃止されました。しかし地域住民の要望により『龍神村』は大字（おおあざ）という表示で残され、正式には田辺市大字龍神村となっています」と説明してくれる。

大字とは市町村そのものの名前ではなく市町村内部の区画名称なので、この使用方法は間違っ  
てはいない。むしろこの手があったのかと私もいい勉強になった。

龍神温泉に到着する。旅館やホテルが数軒あり、私たちが泊まる宿「季楽里（きらり）」はその中でも最も高級感がある。そういえばヨコさんも龍神温泉ならば季楽里がいいと言っていた。

ロビーに貼られているポスターを見ると、龍神村は和歌山県の中央部に位置し県内最高峰の標高1382mの龍神岳をはじめ、1000m級の山々に囲まれている。そのため古くから林業が盛んで、豊富な材木を使った木工や木彫りの工芸品に力を入れていると書かれている。このホテルも建物は鉄筋コンクリート製だが、内装の階段や廊下は木の温もりが感じられる造りをしており、ロビーにあるテーブルや椅子も全て木製でそのこだわりが伝わってくる。

山あいを流れる清流では、アユやアマゴが釣れ、アユ料理はじめシイタケ、梅干しなど素朴ながらも上質で優しい味のグルメが人気だと書かれている。



【季楽里のロビー】

さらに古いポスターを見つける。書かれている内容が面白い。全国の“龍”と“竜”の名を冠した 15 市町村が集う「ドラゴンサミット」というのがある。1988 年の辰（龍）年に秋田県八竜町が提唱して、第 1 回が開催された。その後は茨城県龍ヶ崎市、熊本県龍ヶ岳町、各地持ち回りで開催され、もちろんここ龍神村でも開催された。

地域間の交流と活性化を目的に始まったが、市町村合併により市町村の名前も変わり、残念ながら現在は休止中という。

これを見て私は、似たような横の繋がり的事例を思い出した。それは伊豆大島、奄美大島、周防大島の 3 つの大島による「大島サミット」だ。島ならではの悩みや振興策を共有し活性化を図るというもので、私の知り合いが関わっていて私もアイデア出しなどで応援したことがある。

大浴場に行く。入口には「日本三美人の湯」の看板が出ており、湯の川温泉（島根県出雲市）、川中温泉（群馬県東吾妻町）、龍神温泉（和歌山県田辺市）の温泉名が書かれている。スタンプラリーの台が置かれており、その 3 つの湯のスタンプを集めると記念品と美人証明書がもらえるという。

お客にしてみれば 3 つのうちのどこかの湯に入ったら他の湯にも入りたくなるのが心情で、少なくとも次の温泉旅行の候補地としてインプットされるだろう。これもまた日本三美人の湯という横の繋がりを大切にした結果で、温泉地の差別化や生き残り策の良い事例だと感じる。

その美人の湯に浸かる。スベスベの肌触りというよりもヌルヌルに近い、それも半端でない。私はアルカリ性の湯かと思ったが中性泉で、含まれている炭酸水素の効能らしい。

泉質以外にこの宿の湯殿や浴槽もなかなか良い、サウナもあり近代的だが風情がある。

外に出ると四角い内湯の建物を囲むように丸い露天風呂が広がっている。それは露天風呂から見れば円形の露天風呂の一部分に四角い内湯が突き出たような珍しい造りをしている。



【露天風呂 季楽里の公式 HP より】

夕食はビッフェスタイルで、アユやシイタケなどの名物料理がひとつおとりそろっており、その中でも鹿肉ステーキと大きな梅干しが旨かった。ここは紀伊半島の山奥だと実感する。

本日は土曜日で多くの宿泊客が泊まっているが、レストランはあまり混んでおらず、並ぶこともなくゆっくり食事できる。どのように分散させているのか分からないが、実に上手なサービスを展開していると感じる。

朝食も同様でゆっくり食べて、ゆっくり出発する。

## ■とれとれ市場

白浜の「とれとれ市場」にやって来る。ここでの昼食は各自自由にとることになっている。

この市場は海岸にあるので基本的には海産物などの海の幸が中心だが、紀伊半島は古くから山岳信仰の地だから山の中で食べる梅干しをはじめとする保存食も多い。



【とれとれ市場】

紀伊半島から少し内陸になるが奈良名物の「柿の葉寿司」などもあり、この地域一帯の名産品はほぼ何でもそろっている。

そんな中、私と妻は「めはりずし」を見つけて昼食にする。めはりずしは熊野地方の名物で、簡単に言えば高菜で包んだおにぎりだ。実は先月も私は紀伊半島を路線バスで訪れており、その時に食べた素朴な味が忘れられずに、2匹目のドジョウを探していた。



【めはりずし】

他にもいろいろある。みかんアイスバー、イチゴ大福ならぬミカン大福、白浜のアドベンチャーワールドのパンダにちなんだパンダカレー、イイダコが丸ごと一匹入った踊りたこ焼きはイギリスの元首相ボリス・ジョンソンが立ち寄って焼いている写真まである。新旧入り乱れたグルメは、実に多岐に渡りこの地域の食を楽しむことができる。

## ■立ち寄り湯

バスは日置川（ひきがわ）温泉の温浴施設に到着する。直ぐ目の前が海というロケーションで、露天風呂から見る景色はいかにも南国という雰囲気が伝わってくる。

しかし施設はスーパー銭湯のようで秘湯感は全くない。ここもツルツルとした泉質をしており、酸・アルカリの度合いを示す pH は 10.1 と驚異的な数字で強アルカリ泉になっている。

次にバスは渡瀬（れたらせ）温泉にやってくる。建物の入口には大露天風呂と大きく文字が書かれている。添乗員はこの露天風呂は西日本最大だと紹介してくれる。

その大露天風呂に入る。まず内湯があって、その内湯と繋がっている露天風呂を一番湯として、五番湯までの5つの浴槽があって徐々に温度が低くなる。最も大きい露天風呂が二番湯で、これが西日本最大なのだろう。いや西日本でもこれよりも大きい露天風呂もあったような気がするが、・・・まあいいか。5つ全部合わせれば西日本最大なのかもしれない。

温泉成分表を見ると湧出温度が空欄で書かれていない。これは意図的に書かれていないようで、温泉の成分だけで温泉と判定されている。ということはこの温泉は沸かし湯で、これだけの量の湯を沸かすのに燃料代が相当かかるだろうと余計な心配をしてしまう。

付け加えておくと、日本国内では温泉を名乗るために温泉法という法律がある。その規定では湧出温度が25℃以上、または指定された成分が一定量以上含まれている必要がある。OR条件なので、25℃未満でも成分が含まれていれば良く、あるいは成分はないが25℃以上ならよい。もちろん両方とも満足することがベストだろう。それも25℃と言わずに45℃以上あれば源泉かけ流しにできる。加温つまり加熱処理をすると温泉の鮮度が落ちるので、温泉の持つ老化防止作用つまりアンチエイジング効果が減少する。

## ■川湯温泉

立ち寄り湯をしてバスに乗り5分もしないうちに本日泊まる川湯温泉の宿に到着する。あまりに近いのでさすがに拍子抜けする。宿の風呂に入る前にもう少し体を動かしたく、私と妻はチェックインだけ済ませると近くの河原にできたという露天風呂を見物に行く。

川湯温泉という名前が示すように、ここを流れる大塔川の河原を掘ると熱い温泉が出てくる。それゆえ12月から2月の冬季限定で、河原に露天風呂「仙人風呂」が掘られる。仙人風呂は50mプールくらいの大きさで開放感抜群、川底から湧く73℃の源泉に大塔川の清流を引き入れて43℃にしていると書かれている。青緑色をした清流がとても綺麗なので露天風呂で温まって清流に飛び込む人もいる。非常に冷たそうだが、サウナの後の水風呂のような感じなのかもしれない。



【川湯温泉の露天風呂「仙人風呂」】

今宵の宿「みどりや」は、この川湯温泉では一番大きい宿で大塔川に面している。宿の前の河原にも宿が掘った露天風呂があり、男女混浴だが男女ともに宿が用意した湯浴み着を着て入浴するようになっている。女性用はハワイの民族衣装のムウムウのようで着心地も良さそうだが、男性用は巻きスカートのように着慣れていないせいかわりと違和感がある。しかしこの湯あみ着のお陰で女性も人目を気にせずに解放感溢れる露天風呂を楽しむことができる。

私も妻も湯あみ着を着て露天風呂に入る。ちょうど良い湯加減に仕上がっており、気持ち良く湯に浸かる。ゆっくりと時間が過ぎていく中、暮れなずむ山並みや温泉街の夕景を楽しむ。

露天風呂は宿の目の前なので、6階にある私たちの部屋からもよく見える。それは夜になっても同様で、各客室の灯りによってちょうど良い明るさ、いやちょうど良い暗さになる。この暗さ加減が絶妙で、薄暗い中で多くの人が湯に浸かり露天風呂を楽しんでいる。

薄暗いのと湯あみ着のために見られる側はあまり気にしないで入浴できる。一方で河原と露天風呂とその入浴風景を部屋から見る人たちも多い。湯あみ着を着ているから“覗き”という言葉は適切ではないが、ひょっとしたらこの宿は露天風呂を上から覗くことを売りにしているのかもしれない。その理由は部屋の窓の下の部分が通常は板張りなのにガラス張りになっており、窓を開けることなく眼下の露天風呂を覗けるという珍しい造りをしている。うがった見方をするところこの宿はそのために男女共に湯あみ着を用意して、開放的な露天風呂に入る楽しみとそれを覗く楽しみを両立させている。何とも画期的な戦略で、そして実に面白い。



【部屋から撮った宿の前の露天風呂】



【覗くために窓の下にガラス張り部分がある】

宿の食事は今夜もビュッフェスタイルだが、人数が多くてごった返している。料理を取るのに長く待つことになり、昨晚泊まった宿に比べると雲泥の差だ。これはいただけない。

#### ■世界遺産の湯

本日は旅の最終日、バスは宿を早めに出発して約10分で湯の峰温泉に到着する。

その10分間を使って添乗員が湯の峰温泉の紹介をしてくれた。湯の峰温泉には「つぼ湯」という2人も入れればいっぱいになる小さな湯があり、そこは貸し切り湯になっており1組最大30分の入れ替え制で、人気があるからいつも1時間～2時間待ちだという。このツアーでは滞在時間の関係からつぼ湯の入浴は難しいと言っていた。

ところが実際に行ってみると、朝早いのでつぼ湯が待ち時間なしで入れるという。これは早起きは三文の得、ラッキーの一言に尽きる。私は直ぐに申し込み、1番札を受け取ってつぼ湯に行く。妻を誘うが、遠慮したいと言っているので、2番札を受け取った同じツアーの1人参加のおじさんに「一緒に入りませんか？」と誘うと、彼はふたつ返事で「いいですね」と返してくれる。

つぼ湯は小さな川の中にある岩の割れ目から源泉が湧き出ているという非常に珍しい温泉で、つぼ湯というから壺のような浴槽で、それは小さな小屋の中にある。その小屋の入口に先ほどもらった1番札を掛けて小屋に入り、まずは温泉成分表を見る。湧出温度 53.5℃、pH7.0、含む硫黄・ナトリウム・炭酸水素塩・塩化物温泉で低張性高温泉と書かれている。



【つぼ湯 川の中にある】

湯は多少の硫黄臭があつて、少し白濁している。しかしかなり熱くてすぐに入れる温度ではない。勢いよく水を入れて2番札のおじさんと懸命にかき混ぜて温度調整をする。このおじさんは私よりも少し年上で秘湯巡りを趣味としているようで、つぼ湯に入れたことにいたく感激しており、ここ数年の旅でこれほど幸運なことはないと言っている。

2人の奮闘の結果、何とか入浴できる温度になる。実際に入ってみると壺と言うほど深くはなく、底が岩の下で広がっていて腰を降ろして足を延ばしても入浴できる。肝心の温泉は少しスペースしており、体の芯から温まり実に心地よい。



【つぼ湯】

つぼ湯を出て裏に回ってみると、つぼ湯の直ぐ隣に小さな橋が架かっていて橋の手摺の柱には「湯の谷川」、「壺湯橋」と刻まれている。そして橋を渡るとは細い山道に繋がっている。標識があつて「世界遺産 熊野古道中辺路 (なかへち)」と書かれている。熊野古道を歩く参詣者たちがつぼ湯を湯垢離 (ゆごり：湯で体を清めること) に使っていたと案内看板にある。

そして驚くことに、つぼ湯も世界遺産に登録されていると書かれている。この単なる掘っ立て小屋、いや小屋ではなく、つぼ湯の方かもしれないが、いずれにしてもこれが世界遺産とは、世界遺産検定1級の私にして初めて聞いた。さすがに気になったので調べてみた。



【世界遺産熊野古道中辺路に続く橋 右奥はつぼ湯の待合所でその手前の屋根がつぼ湯の小屋】

ユネスコの世界文化遺産、通称“熊野古道”の正式名称は「紀伊山地の霊場と参詣道」で、霊場と参詣道で構成されている。霊場とは修験道の「吉野・大峯」、熊野信仰の「熊野三山」、真言密教の「高野山」の三霊場のことで、それらを結ぶ参詣道も世界遺産に登録されている。参詣道と一言にいってもその範囲は実に広くて建造物以外に道や川、そして湯垢離の場として湯峯温泉（湯の峰温泉）も含まれている。

だとすると湯の峰温泉も世界遺産と言っていいかもしれないが、年代が“有史以前”になっていることと、世界遺産の定義は不動産であることから、有史以前から存在したと思われるつぼ湯を世界遺産と言っているのだろう。この解釈には賛否両論ありそうな気がするが、ある意味“言ったもの勝ち”で、ユネスコが認めた世界で唯一の世界遺産の温泉として地元では定着している。

私としても1番札で入浴したつぼ湯が世界遺産であって欲しいのと、2番札のおじさんの今後の秘湯巡りの励みにしてもらいたいのでこれを追認したい。

つぼ湯を満喫した後、つぼ湯とは源泉が異なる湧出温度74.5℃の「くすり湯」と「一般湯」に入る。くすり湯は源泉100%と書かれており、おそらく源泉を熱交換で温度を下げたものだろう。それに対して一般湯は水で薄めて温度を下げたもので、そのため入浴料金も若干異なる。

#### ■最後は十津川温泉

再びバスに乗り、30分ほどで十津川温泉「ホテル昴」に到着する。このホテルは先月私が日本で一番長い路線バスの旅をした時に立ち寄ったホテルだ。その路線バスは奈良県の大和八木駅から和歌山県新宮駅までの169.9kmを、バス停の数168、それらを約6時間半で結んでいる。（詳しくは旅行記「四国中国紀伊の旅2022」参照）

ホテルのロビーには西村京太郎の十津川警部シリーズの本がたくさん飾ってある。新聞の切り抜き記事もあって、その中には西村京太郎がこのミステリー小説の主人公の名前を十津川省三という名前にした経緯なども書かれている。

作者としては、強そうで優しくて一度聞いたら忘れられないインパクトのある名前にしたかったが、なかなかそのイメージに合った名前が思いつかなく、偶然にも和歌山県の地図を見ていて十津川村が目にとまったのでこれに決めたという。

確かに十津川という名前は彼の思惑通りかもしれない。



【ロビーの十津川警部シリーズ展示】

しかしこれについて村役場のコメントが、「十津川村には十津川という姓の人はひとりも住んでいません」と書かれている。

そのコメントを見て私は、半分は「へーそうなのか」と驚き、そして残りの半分は少し残念な気がした。ひとりもないという事実は書かないといけませんが、村にとってはチャンスなのだから、もう少し気の利いたコメントは書けないのだろうか。

私ならば「十津川さんがひとりもないから、全国にいる十津川さんは是非移住して来てください。名誉村民として厚遇します。移住いなくても結構ですから一日警察署長をお願いしますから遊びに来てください」と付け加えたい。

温泉は先月来た時と変わらずに、山間の温泉地らしく実に静かだ。風情がある建物に露天風呂、お湯もまた良い。

この旅の最後の入浴が終わり、再びバスに乗って大阪に向かう。バスの中は完全にお昼寝タイムになっており、ツアー客たちは夢の中で7つの秘湯巡りの旅を終えようとしている。

そんな中、私は今回入った温泉を思い返し、花山温泉、紀州黒潮温泉、龍神温泉、日置川温泉、渡瀬温泉、川湯温泉、湯の峰温泉、津川温泉と8湯あることに気が付く。

7湯ではなく8湯だと、ツアー名称に合わないか。しかしまあ、それも良としよう。1湯はサービスだと思えば、得をしたことになる。

そして紀伊半島にも秘湯があるのかという私の当初の疑問は完全に払拭された。

## ■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって評価項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

その評価項目とは泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の7項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、湧き出ている湯の泉質と、湯殿や湯船などの湯以外を風呂として区別している。立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するように変更している。

評価基準は5段階としてその定義は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

尚、今回は旅行会社の企画したツアーのため私が直接宿泊費を払っていないので、コスパは宿のHPで宿泊代を調べて評価した。

竜神温泉「季楽里」は泉質4、風呂4、料理4、コスパ4、サービス4、建物・部屋4、立地環境4、総合点4.00になった。全て4点というのは平均的に優れた温泉宿ということになる。

湧出温度66℃、pH7.1、泉質はナトリウム-炭酸水素塩・塩化物温泉（低張性中性高温泉）になっている。

川湯温泉「みどりや」は泉質3、風呂5、料理3、コスパ4、サービス2、建物・部屋4、立地環境4で、総合点3.57になった。料理を取る待ち時間が長いのでサービスは2にした。

湧出温度43.3℃、pH7.8、泉質はナトリウム-炭酸水素塩温泉（低張性弱アルカリ性高温泉）になっている。

立ち寄り湯をした温泉については、湧出温度、pH、泉質を記しておく。

花山温泉は湧出温度25.2℃、pH6.2、泉質は含む二酸化炭素・鉄（Ⅱ、Ⅲ）-カルシウム・マグネシウム-塩化物温泉、高張性中性温泉になっている。

紀州黒潮温泉は湧出温度31.9℃、pH6.6、泉質はナトリウム-塩化物温泉、低張性中性温泉になっている。

日置川温泉は湧出温度33℃、pH10.1、泉質はアルカリ性単純温泉になっている。

渡瀬温泉は湧出温度の記載がなく、温泉法の規定温度25℃以上の判定が○になっていないため、湧出温度25℃未満、pH6.7、泉質はナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉、低張性中性泉になっている。

湯の峰温泉の「つぼ湯」は湧出温度53.5℃、pH7.0、含む硫黄-ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物温泉で低張性・高温泉、また「くすり湯」は湧出温度74.5℃、pH7.9、ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物温泉で低張性弱アルカリ性高温泉になっている。

十津川温泉「ホテル昴」は湧出温度60℃、pH6.9、ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物温泉になっている。

## ■旅の記録

旅行は2022年12月10日（土）～12月12日（月）の2泊3日で実施し、行程を以下に記す。

- ・1日目 自宅を出て8時18分に新横浜駅で新幹線に乗り10時30分に新大阪駅に到着、大型バスに乗り和歌山県の花山温泉「薬師の湯」で昼食と入浴、ヨコさんと再会、黒潮市場「紀州黒潮温泉」で立ち寄り湯、龍神温泉の宿「季楽里」にチェックイン

- ・ 2 日目 9 時ホテル出発、「紀州梅の里なかた」で買い物、白浜の「とれとれ市場」で昼食、めはりずしを食べ、日置川温泉「リヴァージュ・スパ ひきがわ」と渡瀬温泉「大露天風呂」に立ち寄り湯、川湯温泉の「川湯みどりや」にチェックイン、川湯温泉の露天風呂「仙人風呂」を見物
- ・ 3 日目 8 時 50 分にホテル出発、湯の峰温泉の「つぼ湯」、「くすり湯」、「一般湯」に入浴、十津川温泉「ホテル昴」で昼食と立ち寄り湯、バスで一路新大阪駅へ向かい 17 時 15 分新大阪駅発の新幹線に乗り帰宅

費用は 2 人で約 17 万円、1 人当り約 85000 円、以下 2 人分の内訳を示す。

- ・ 阪急交通社払い込み 165490 円 (元は 2 人で約 20 万円だったが  
全国旅行支援 32000 円などの割引適用)
- ・ 飲み物、土産物など 約 3000 円 (全国旅行支援クーポン券 8000 円使用)
- ・ 自宅から新横浜駅までの交通費 約 2000 円